

くらし・家庭

谷中のリボン

② 山崎 範子

百年の眠りから覚めた資料は、どんなものだったのだろうか。

1894年(明治27年)に建てられ、2013年に解体された元リボン工場。解体から半年後に保存した一部の部材、「のこぎり屋根」の三角トラスの骨組みや柱、野地板、北側の窓ガラス、調査図面などを「ギャラリーTEN」に展示した。

東京・台東区谷中にあるこの会場は、リボン工場がかつて利用した藍染川(現在は暗渠)の1キほど下流にある。

展示では、国内初のリボンを生産したこの町が、藍染川を利用した近代産業の集積地であったことも伝え、大きな反響があった。

渡辺四郎の収集資料



渡辺四郎と、譲られた時のコレクションの景。リヤカーを借りて小雨の中、谷根千の事務所に運んだ

ここまでの記録をまとめた冊子、「谷中ののこぎり屋根く谷中のこ屋根と藍染川ファクトリーライブ」を14年11月に発行した。

こうした活動が功を奏したのだろう。工場解体から1年後に、事務所の書棚にあった資料が、元工場の持ち主から譲られた。これが

「谷中のリボン 渡辺四郎コレクション」である。

資料は19世紀末に刊行されたものも含め、1910〜20年代のものが多かった。英独仏語を中心に製織、織機、養蚕、デザイン、経済など多岐にわたり、実物のリボンの見本帳も相当数あった。

渡辺四郎の自筆ノートやメモから、四郎の経歴や視察先の住所も知ることができた。

譲られたばかりの資料を、2度目の展示「復活に向けて 谷中のこ屋根展 in H A G I S O」で公開し、製糸工場や織機研究の第一人者である玉川寛治さんに見てもらおう。

「渡辺四郎が収集した原書の技術図書は、個人の収集として日本最大規模と思われる。リボン製造業を、日本で立ち上げ、成功させようとした。渡辺四郎と一族の研究は、日本の産業革命の重要な一部分になるに違いない」。玉川さんの言葉が後押しとなった。

現在の国内リボン生産地である福井のリボン工場を皮切りに、関係者や専門家を訪ねては資料を見てもらい、意見を聞いて歩く。部材や資料の保存活用に奔走する仲間と、生まれて初めての論文執筆に挑むことになった。

(谷根千工房)
(金曜掲載)